第19回県政知事懇談

湯﨑英彦の地域の宝
チャレンジ・トーク
（府中市）

と　き　平成27年12月19日（土）
ところ　府中市保健福祉総合センター「リ・フレ」
３階パレアホール

目　　次　　頁

開　　会 …… 1
知事挨拶 …… 1
事例発表者紹介 …… 2
事例発表① …… 3
事例発表② …… 10
事例発表③ …… 18
事例発表④ …… 21
閉　　会 …… 28

広　　島　　県

開　　会

○司会（豊田）

それでは皆さん，改めましてこんにちは。（「こんにちは。」の声あり）

大変長らくお待たせをいたしました。ただいまから，湯﨑英彦の地域の宝チャレンジ・トークを開催いたします。

私は，広島県広報課で豊田と申します。本日は，未来へのチャレンジへ向けて元気の出る会にしたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

（拍手）

知事挨拶

○司　会

それでは初めに，湯﨑英彦広島県知事がご挨拶を申し上げます。

●知事（湯﨑）

皆様，こんにちは。

今日は，師走の土曜日で，お天気がいいのでお掃除にぴったりかと思いますが，このような日にたくさんお集まりいただきまして本当にありがとうございました。

この地域の宝チャレンジ・トークは，府中市で４回目になります。またこうやって府中の皆さんとお会いできるのを大変楽しみにしてまいりました。今回開催に当たりまして，戸成市長を初めとしまして府中市の市役所の皆様に大変お世話になりました。この場をお借りして御礼を申し上げたいと思います。

私は，ちょうど６年前の 11 月 29 日に就任したのですが，驚くことに，この宝さがし，あるいはチャレンジ・トークを就任直後，12 月には第１回目を始めました。ですから，ちょうど丸６年たっていまして，この間に 72 回開催をしました。今４巡目で発表者が 590 人になりまして，来場者が 8,900 人を超えておりますので，今日をもって 9,000 人を超えたことになりました。おかげさまで本当に大きな蓄積ができつつあって，県政にとっても大変な宝になっていると思いますし，地元の住民の皆様にもとても喜んでいただいき，発表者の皆様から元気をもらって皆様もお帰りいただいているという形になっております。ぜひお楽しみいただきたいと思いますが，今日はこの会に先立ちまして市内の訪問を２カ所ほどさせていただきました。

１カ所目は上下町で，瀬川百貨店という昔の豪商の店舗なのですが，今，移住者が集う新しいにぎわいの拠点として再生に取り組んでおられます。今日は後で発表もしていただ

きますが，本当にすごく大きな建物で歴史的な建物ですが，これからどんどん変わっていくのではないかと，非常に楽しみなところでありました。

その後，父石町に移動しまして空き店舗を利用して地域の人がくつろげるサロンを開催されています。プラチナ創業塾というＮＰＯで地域活動をされていますが，本当にたくさん活動がありまして，今日もたくさん集まっていらっしゃいました。プラチナというのは55歳以上の方々，プラチナ世代といいまして，そういう方々が集まって活動をされているのですが，私はかろうじてまだプラチナにちょっと足りないぐらいで，そんなに遠くない将来にプラチナに入るのですが，こんなに元気だと楽しみだなという感じがしました。

今日は４組の皆様，府中市で活動をされてる方々に発表をしていただく予定になっております。いろんな挑戦をされてる皆さんなので改めてお話をお伺いして，そして明日からの我々自身，皆さん自身の活動についても考えをめぐらせていただく機会になればと思っておりますので，70分ぐらいかかると思いますが，よろしくお願いをいたします。

（拍手）

○司　会

湯﨑知事，ありがとうございました。それでは，知事，檀上の席へお移りください。

事例発表者紹介

○司　会

それでは，本日の事例発表者の皆さんをご紹介したいと思います。発表者の皆さんは，檀上のほうへお願いします。

（拍手）

それでは，皆さん向かって左からご紹介させていただきます。市内の空き家の再生や移住者の誘致に取り組まれているＮＰＯ法人アルバトロス理事長の藤原幸大さんです。（拍手）

続きまして，市内の商店主らがメンバーとなり，中心市街地の活性化に取り組まれている府中まちなか繁盛隊の高橋良昌さん，重森正治さん，稗田由子さんです。（拍手）

続きまして，間伐材を使用した遊具などを製作して市内の保育園や幼稚園，小中学校へ贈呈されている県立府中東高等学校インテリア科を代表して，３年生の新岡春南さん，中島雅貴さんです。（拍手）

続きまして，小中一貫教育として地域全体で連携し，生徒によるガイドツアーの実施など，上下のよさを町外へ発信して地域の活性化に貢献されている市立上下中学校３年生の谷山莉香子さん，横山愛美さん。続いて市立上下南小学校６年生の新納叶望さん，それから市立上下北小学校６年生の橋本桜果さん。以上４名です。（拍手）

発表者の皆さん，どうもありがとうございました。一旦お席のほうにお戻りください。

ここからは，湯﨑知事にコーディネーターをお願いしたいと思います。

それでは湯﨑知事，どうぞよろしくお願いいたします。

事例発表

事例発表①

●知　事

それでは改めましてよろしくお願いします。

今日これから発表していただきます４組の皆様は，それぞれの学校や地域，職場でいろんなチャレンジをされている皆さんです。

初めに発表をいただきますのが，今もご紹介がありましたＮＰＯ法人アルバトロス理事長の藤原幸大さんです。先ほど写真にあったように私も訪問させていただいたのですが，藤原さんを改めてご紹介をさせていただきますと，藤原さんは福山市ご出身です。東京で就職後，２年前に府中市にＪターンをされました。市内に多く存在する空き家に新たな価値を創出するためＮＰＯ法人を立ち上げて空き家の再生や移住希望者へ住宅情報の提供を行うなど地域住民と移住者を結びつける活動に取り組んでいらっしゃいます。

今日の発表のテーマは「ＮＰＯアルバトロスのチャレンジ」です。

それでは藤原さん，よろしくお願いします。

（拍手）

○事例発表者（藤原）

皆さん，こんにちは。（「こんにちは。」の声あり）今日は，ちょっと緊張して顔がにやけてしまっているんですが，ちょっとリラックスしたような形で，あまり硬い話にならないような雰囲気で発表させていただければなと思っています。よろしくお願いいたします。

今日のテーマなんですけれども，広島県府中市ＮＰＯ法人アルバトロスのチャレンジということで，今年の２月に，府中市鵜飼町のほうで事務所を設けてＮＰＯ法人アルバトロスという団体を立ち上げました。その１年間，約１年間たったんですけれども，その取組と，今日はテーマが広島未来チャレンジということなんで，ＮＰＯ法人の今後のチャレンジ。その２点のお話をさせていただきたいと思っています。よろしくお願いします。

特定非営利活動法人アルバトロスということで，ちょっと時間があれなので，スライドで見ていただきながら発表を聞いていただきたいと思うのですが，まず，空き家問題。全国,今ニュースでいろいろ空き家のことについてニュースが出ていると思います。そういったことに対して府中市の起業家さん，そして僕が地域おこし協力隊という市役所の活動の一環の中の仕事を担っているのですが，そういった方。そして，不動産屋さんであるとか

電気屋さん，農家さん，そして大工さん。そういった方々と一丸となって空き家問題に対して府中市の人たちで何ができるか。また，府中市のほうから全国へ向けて，空き家の問題って実はこういうことじゃないか。こういった活用方法があるんじゃないかっていうのをメッセージとして全国に届けていきたい。そういった取組をまずやっていると。じゃあ誰にそのメッセージを伝えていきたいかっていうところなんですが，やはりこちらも，移住ブームといいますか，人生の楽園とかってテレビ，皆さん，ご存じですかね。そういったことでテレビのメディアのほうでも，都市部から第２の人生っていうような形で，田舎に移れば人生観がよいほうに変わるであるとか，すごく何か移住っていうものが壮大な大きな自分の転機になるようなことで放送はされていますが，ただ，一概に全てがそうやって移住したから全て生活がうまくいったり，心が豊かになったりっていうことは，正直，僕自身も２年前に移住した時には，そういったある意味夢を描いてきたんですが，やはり現実はなかなかいろんな不安があると思います。そういった不安を，僕たちがＮＰＯの団体として，また，一同じ目線で，移住者目線でそういった受け皿のサポートをできないか。主にはこういった活動を１年間やってきました。

次に事業ですけれども，皆さん，府中市に空き家バンク制度っていうのがあるのをご存知ですか。これは府中市，いろんな全国自治体が取り組まれている制度なんですけれども，空き家を，何で空き家が問題になってるかっていう１つの根源があります。それが地域の不動産業者さんが取り扱えないんですね。なぜ取り扱えないかといいますと，簡単な話でして，まず古い。そして荷物が片づけられてないとか。また，家賃が例えば月 5,000 円とか。そういった条件的には悪い中で，仕事として，前向きにそういった空き家，一軒家っていうものを取り扱うのが難しいんですね。そういったことで空き家の流動化っていうのがなかなか全国的にもできてないっていうのが１つの原因であります。そういった民間でできない部分を行政が情報発信をするというのが空き家バンク制度です。その空き家バンク制度に対して，僕たちアルバトロスっていうのはメンバーが不動産の方であったり，先ほどご紹介したような空き家に関連がある専門のプロです。そういった方々の少しの１日１時間でもいいと思います。そういったアドバイスを受けながら，空き家を活用するにはこういったことが必要なんだよというようなサポートが基本的な取組になっています。そのほか，空き家・空き地活用事業とか，主に移住相談窓口とかっていうことを行ってきました。

具体的に一つずついきますと，府中市空き家バンク制度との連携ということで，まずは移住の相談窓口っていうものを設けようと考えました。この写真に写ってるのが東京ふるさと回帰センター。東京に，この移住っていうものに対してブームがきてる中で，移住フェアっていうのが今あるんですね。世の中に。そこで何をやってるかというと，全国の 47 都道府県の自治体さんが一気に集まって，東京とかに大体１万人規模の方が１日にその会場にばーっと集まって，いろんな自治体さんのお話を聞くんです。うちはこういった町で

すと。ぜひ来てくださいと。そういったアピールをする場なんですけれども，そういったところに府中市のお力をお借りしながら参加をさせていただいて，府中市ってこういう町ですよとか,受け皿としては僕たちこういう団体がありますよ。そんなことをお伝えしに，年に，今年は６回ぐらい行かしていただいて，東京大阪。そういったところで，実際に問い合わせ件数も１年間で，訪問者も合わせて約 20 名ほどになってます。数でいいますと，少ないって思われるかもしれないんですけれども，それまではほとんどそういった府中市が，外部，都市部に対して直接メッセージを届けたり，そういった取組っていうのが本格的になったのがほんと今年からになってると思います。そういった意味で今現状は，移住実績でいいますと６組府中に関心を持ってくださって実際生活されてる方がいます。そういったことで広報しているというような状態です。

その方が，いきなり紹介をして，もう府中市に決めたって言って移住するわけではありません。ということで，写真に写ってるのがＮＰＯ法人の事務所なんですが，こちらも築 100 年の建物です。そこを簡単に改修をさせていただいてその場所をお試し暮らしっていうような形で,実際に低価格で泊まっていただきながら僕たちが府中市とか,あと,物件っていうもののオーナーさんに対してご案内をして，こういった方が来られてますっていうようなことを今年やってきました。

空き家の空き地管理というところで，風通し隊というのを実は立ち上げておりまして，これまだ実績が今年ゼロです。どういったものかといいますと，やっぱり空き家の所有者の３分の１が大阪であるとか東京であるとか，実際に住まわれてる，また，所有者の方っていうのがすごく遠くにいらっしゃるんですね。そういったことでもう,お盆正月そういった時に大事な少ない休みを使って，地元に帰ってくるわけです。交通費もかかりますし，１日は掃除でぐったり疲れてしまって，大事な休みもゆっくり休めないと。そういった手間を，もう低価格で空き家の状態をよくしようというきっかけづくりということで，月に 2,000 円ぐらいで風通しを月１回して，家の状態の連絡であるとか泥棒が入ってないか，そういったことが写真つきで報告をするっていうようなサービスを今年始めました。もし皆さん，依頼があればもうぜひやらしていただきたいので。こちらはもう宣伝でよろしくお願いしますということです。

次に，どんな活用法をやってるかっていう具体的な例なんですが，先ほど紹介していただきました上下町の旧瀬川百貨店の再生を今府中市そして県の支援をいただきながら今年度やっています。その場所は，瀬川百貨店の場所っていうのがもう２年前にちょっと廃業になられて物件を使ってほしいっていうようなお声をいただきまして，じゃあまずは何からしていこうかっていうことで，人海戦術で片づけていきました。そういった上下の商店街の，やっぱり白壁の町並みっていう部分の歴史的なアピールであるとか，そういった活動が実は始まっていて，あなたのお力が必要なんですっていう具体的な広報を都市部の方へ実際に宣伝に行きました。そういったかかわりが生まれた中で 11 月に小商いメッセって

いうものを開催をして，大体３日間で1,600人ぐらい来ていただきまして，上下町来たことがない方，そういった方々に興味を持っていただくような活動をしています。これからこの瀬川百貨店っていうのもそういった新しい移住希望者が実際にこの物件を使って何か地域で行える仕事ができるであるとか，地元の方が既にフリーマーケットでこの場所を活用されていますので，そういった地元の方といかに共生しながら暮らしていけるか。そういった情報発信を僕たちは今後もこちらの物件でしていきたいなというふうに思っています。

ここからが本題なんですけど，あと２分しかないんで，ちょっと早口でいきますね。これからのチャレンジということで，僕たちが府中市の紹介を都市部でする際に，人生観の変わる移住を提案したいというふうにお話してます。特産品がこんなことがあるから，空き家の物件情報がこんないい物件がありますよという紹介はもう僕ほとんど一切していません。というのが既にもう今までの移住であったら，富士山が見えるところに景観がいいとこを選ぶんだったら行きますし，仕事で移住をするんであればもちろん都市部にいたほうが給料もいいですし，選ばないですよね，地方のほうに。そういったことで質問をするのが，大体僕は，何で地方のほうに移住されたいと思いましたかというふうな，もう本当の最初にきっかけになった目的の部分をお聞きするということを気をつけて行っています。そうったことでこれから僕たちは，空き家のあり方・生き方を考える場づくりっていうのをしたいと思っています。どういうことかというと，需要と供給っていうところがあって，所有者さんは，金銭的な負担とかどこに相談していいかわからないっていうようなことがあったり，移住希望者は何が知りたいかというと，皆さんのありのままの生活の暮らしがどんなものかっていうのが一番知りたいと皆さん言われます。そこの地域に魅力があるかどうかっていう判断の基準が，実は皆さんの普段やられている生活を紹介するだけでものすごく魅力に感じられるんですね。これがなかなかぴんと来ないかもしれないんですけど，実はここが本当に大事な部分で，この情報発信をこれからほんとしていきたいと。じゃあどんなふうに情報発信をしていけばいいかって言いますと，移住者の不安で，何でそういったことが知りたいかっていうと，こういった不安がいっぱいあるんですね。僕もそうでした。そういったことで，この辺は飛ばしながら，移住しないとわからない不確定要素っていうのはさまざまあるんですけれども，そのもともとこの府中市で暮らされてる皆さんの生活を知ることで，何が得れるかといいますと，もう，飛び込んで来られる前に，ある程度情報を知った上でこちらに来れるっていうこと。また，移住後も，当初，希望とされてたことが全てうまくいくわけではないと思いますので，そういった一つ一つ，例えば物件の借り方であるとか，例えば町内会長さんってどんな人ですかっていうところに対して，僕たちができる限りサポートしていければなと。そういった拠点づくりを，本当に実際今年，来年は，動いていきたいと思ってまして，あの写真の物件なんですけれども，14ＬＤＫっていうような，大きな大きな家です。そこですることで空き家に関する先ほどのよう

な情報発信を都市部の移住希望者，もしくは空き家に関することに関心がある方っていう方々に対して，情報発信していきたいと。また，この広さを生かしてやっぱり多種多様な人間が集まっている，ＮＰＯ法人もそうなんですけれども，年齢問わず，そして老若男女問わず，職業問わずいろんな方々が集まれる場をつくると。それが一番の目的でして，もうここで最後のスライドなんですが，人生観の変わる移住とともに，なぜ空き家とか移住者をこちらの府中市に呼びたいかっていう僕らの目的が,やっぱり府中市も人口 20 年後に２万 7,000 人になるといわれてるんですね。その時に，今の，例えば経営者の方であれば職業的に売り上げが顧客が半分になったことを想像してみると，すごく危機感があると思います。空き家もそうで，実はうちは空き家になってないからこの話関係ないんだと思われるかもしれないですが，家を所有されてる誰もが２，30 年後はそういった問題に家族間で話していかないといけない問題なんですね。そういったことを僕たちは府中市の皆さん方々にはああいった場づくりをチャレンジをしていって一緒に府中市，これから人口減っても何か生活していける豊かな暮らしって何だろうとか，そういった話ができる場をつくっていきたい。それとともにそういった場がありますよということをいかにうまく外に発信できるか。それをすることによって，府中市の私たちのそしてこれからの暮らしのあり方っていうのを考えていけるっていうふうな活動をＮＰＯ法人を通してやっていきたいと思っています。

皆さん，アルバトロスという意味はアホウドリで，実際に絶滅危惧種になった鳥の名前なんですね。何でそんな名前つけたかというと，ゴルフのパー５の２打っていうことではありません。これは府中市の皆さんにつかまえやすい存在でありたいという思いでつけた名前です。こういった活動を応援してくださる方々のご協力と，一緒にやっていきたいっていうアピールをこれから皆さんに周知していただけるようにコツコツと頑張っていきますので，皆さんよろしくお願いします。

以上です。ありがとうございました。

（拍手）

●知　事

藤原さんありがとうございました。藤原さんご自身もＪターンということで，東京にいらっしゃったんですよね。

○事例発表者（藤原）

東京にいました。

●知　事

その戻ってこようと思われた決断のきっかけっていうか理由は何だったのですか。

〇事例発表者（藤原）

一番聞かれたくない質問なんですけれども，実は，ほんと僕は帰りたくなかったんですが，奥さんのほうから，仕事ばっかりしてこれは家族かと。ちょっと足元見てくれというふうな形で。もともと中学生からの同級生で結婚しまして，子供ができて，ちょっと広島のほうに帰ろうということで，お恥ずかしながら帰ってきたところです。

●知　事

いや恥ずかしくないと思います。

今，広島県の新しい未来チャレンジビジョンの新たな目指す姿っていうのは，「仕事にチャレンジ，暮らしもエンジョイ，活気あふれる広島県」で仕事ばっかりして暮らしを犠牲にするというのはもうやめましょうと。東京だとよくそういうことが起きるのですが，広島ではそういうことはやめて，仕事も暮らしも欲張りに追っかけていきましょうと目指しており，ピッタリです。実践されてるということです。

もう一つ，多分みんなに聞かれて，聞かれたくない質問かどうかわかりませんが，もともと福山ではないですか。近いですよね。（笑い）

〇事例発表者（藤原）

近いですね。

●知　事

どうして府中だったのでしょうか。

〇事例発表者（藤原）

今，ＮＰＯとともに並行してやらしていただいてる地域おこし協力隊という仕事を見つけたのがきっかけです。

●知　事

なるほど。

〇事例発表者（藤原）

で，これも言ってもいいかわかんないんですが，これも実は，もともと地域おこしっていうことに携わっていた人間ではないので，ほんと職探しの一環で，ハローワークを見て実はこの仕事を見つけたんですね。でも，自分のスキルアップとか家族との時間とも向き合いながら，少ない給料であったとしても，３年間自分の経験になる。そしてその結果地

域に何か貢献できることができるのなら，この仕事ってすごいなと。その時間使いながらお金がもらえるんだというふうに思って，すぐに奥さんに言って，じゃあ，まあ３年間許してあげるよということで，させていただいてます。

●知　事

実際に戻ってこられて，福山と府中の違いみたいなところはありますか。福山はどちらなのですか。

○事例発表者（藤原）

松永のほうですが，柳津町というところの出身です。

●知　事

府中に来られてみて，どうですか。

○事例発表者（藤原）

まず，海がないなっていうのがあります。（笑い）

●知　事

海がないですね。

○事例発表者（藤原）

あと，ほんと，やっぱりまだ２年間しかいないですけれども，ほんと自分のことをすごくよく上手に表現されたりであるとか,起業家の方が多くいらっしゃるなあとか,すごく,「わし，こんなんやっとるよ。」とかっていう方々の熱気というものっていうのはすごくあるなと感じさせていただいております。

●知　事

なるほど。府中市は福山に非常に近いですし，府中自身も非常に経済的にも，恵まれた地域だと思います。上場会社がたくさんありますし，ベンチャー会社もたくさんありまして，伝統産業もあります。だけど人口が減っている，いろいろな課題も抱えているということも事実です。そういう中で，恐らく移住というか人を呼び込まなければいけないという強い意識というのは，申し訳ないですがあまりなかったのではないかと思います。過疎地域に行くと，もっと切実なので，もっとすごく，前々からされているところはあるのですが,府中は多分最近になってからの取組で,空き家バンクなども最近の取組なわけです。そういう中で藤原さんが出された，この人生観の変わる移住というコンセプトは，なかな

かいいコンセプトかと思います。

○事例発表者（藤原）

これが，僕も人から教えていただいたようなことなんですが，でも，自分自身が実際そうだったように，ただの引っ越しにならないように自分自身が変わらなければどこに引っ越そうが，東京にいようがこちらで仕事をしようが変わらないよねと。そういったことで，もう定住移住って分けることではなくて，ああいった場づくりのチャレンジをしていきながら，１週間でも滞在していただいて，あ，こういう生活もあるんだとちょっとリフレッシュして，もともと東京でやられてるお仕事とかがちょっと前向きになったりとか，そういう交流も一つ移住定住にこだわらなくてもいいかなというふうに考えます。その方々がまたつないでくれて，何か府中市にとっていい取組ができる可能性をどんどんどんどん広げていければなと思っています。

●知　事

確かに最後は人生観が変わるとか，あるいはこういう人生を送りたいというところにその地域が合っていないと移住してもなかなか長続きしないということも確かです。地域にとっての魅力というのが必要で，それはさっきおっしゃったとおり，地域の人自身の生活の中にあるといえます。私も移住関係のいろいろな活動を見ていますが，本質的なところをしっかりとつかみ，それを表現されて展開されており，府中市の移住促進の活動が，本質を捉えた形で進んでいるということで，藤原さんには，すごくお力をいただいているのではないかと思います。協力隊は１年ですね。ＮＰＯは，もちろんずっとということだと思いますが，ぜひこれからもこの府中市のために，藤原さん，頑張っていただけるのではないかと思います。

もう一度，この府中のために頑張っていただいている藤原さんに大きな拍手をお願いいたします。

（拍手）

○事例発表者（藤原）

ありがとうございました。

事例発表②

●知　事

ありがとうございました。

それでは続いての発表です。次の発表は府中まちなか繁盛隊の高橋良昌さん，重森正治さん，稗田由子さんにお願いをします。

このまちなか繁盛隊は，市内の商店主らがメンバーとなりまして中心市街地の活性化に取り組むために結成をされたというものです。売れ筋商品ではなくてこだわりの逸品を掲載した府中まちなか一店逸品ブックの制作やお店のＰＲと集客を兼ねたイベント，府中まちなかわくわくお店めぐりツアーを企画するなど，中心市街地の魅力を発信する事業を次々に展開をされておられます。

発表のテーマは，「府中発繁盛ストーリーへの道，よろこび・潤い・イキイキと」です。

それでは高橋さん，重森さん，稗田さん，よろしくお願いします。

（拍手）

○事例発表者（高橋）

皆さんこんにちは。府中まちなか繁盛隊代表の高橋と申します。よろしくお願いいたします。

今日は，10 月に東京で開催されました全国逸品セレクションというのがありまして，全国から集まりました商店がご自慢の商品を持って臨むコンテストで，府中がグランプリをとりまして，しかも，フード部門，食の部門のグランプリも府中がとりまして，それから，ノンフードといいましていわゆる物販サービス業，この２つの部門で争われるんですけども，どちらも府中がグランプリをとりまして，全国制覇をして帰りました。

（拍手）

で，後ほどお二人，今日来てもらっておりますので，高々とトロフィー，盾を皆さんに見ていただいて，またその逸品を少しご紹介をさせていただきたいと思いますので，あわせてよろしくお願いをいたします。

「府中発繁盛ストーリーへの道，よろこび・潤い・イキイキと」というテーマでお話させていただきますが，今申し上げましたように，府中発というのはこれから府中を飛び出して全国に今展開を始めております。というのが，今，申し上げました全国グランプリをとったというのをきっかけで，この２点には全国からすごい注文が今入っています。そうしたことも始めまして府中発繁盛ストーリーへの,いばらもいろいろあると思うんですが,繁盛ストーリーへの道ということで地域の皆さんとともに喜び，町が潤い，そしてスタッフ皆さんとともにイキイキとこれからやっていきたいという思いも込めまして，これより府中まちなか繁盛隊の活動リレーを発表させていただきます。

かつてはにぎわっていた府中の商店街も今やシャッター通りと化し，商店街としての機能を失ってしまいました。しかし，府中の中心市街地を見渡してみましても頑張ってるお店や個性的なお店，またユニークな店主がいる店，また逆に現状を何とかしたいと模索をしてる店などたくさんございます。そうした志を持つ商業者を中心に平成 22 年府中商工会議所の支援を得て，８店舗でこの府中まちなか繁盛隊を発足させました。今年５年目になりますけれども，私たちの地道なこうした活動が功を奏して，現在中心加盟店が 19 店，そ

して準加盟店，いわゆる協力してくださるお店が 29 店の 48 の事業所で商店街単位組織の枠を取り外しまして，全国でも異例の形で地域商業の活性化に取り組んでいるネットワークグループでございます。

私たちの取組には３つの目的テーマがございまして，まず，１つ目がにぎわい創出事業で２つ目が個店研修事業，そして３つ目が商店街創業促進事業という，この３つの目的を持って活動をさせていただいています。これよりそれぞれの主な活動を少しずつご紹介をさせていただきます。

まず，にぎわい創出事業の１つ目でございますが，「府中まちなかわくわくお店めぐりツアー」というイベントを行っております。これは，メンバースタッフがガイド役を務め，コース別に歩きながら３，４店の店舗へお客様をご案内し入店の足がかりをつくっていただくという企画で，平成 23 年より継続し，今年で第７回目を開催させていただきました。参加者延べ人数 352 人を数え，参加してくださった皆様方の満足度も 95％前後と大変好評をいただいておるところでございます。

次に，「府中まちなかお店ゼミナール」，通称まちゼミという活動も行っております。これは，店主やスタッフが講師となって専門知識や得する情報，またプロの技を基本的無料でお教えする少人数制のミニ講座で，パンづくりを兼ねた市民参加型の活性化イベントでございます。追加講座を含め３回を開催させていただき，延べ 764 名の方々にご参加をいただいているところでございます。来年２月にはまたさらにパワーアップした企画での開催を予定をいたしております。

そして，にぎわい創出事業の３つ目といたしまして，10 月 31 日商店街内の公園で，初の企画といたしましてハロウィンイベントを開催し，地元の高校生を含めて多くのボランティアスタッフとともに普段商店街になじみの少ない若い世代の方々を中心に 1,000 人が商店街に集いまして，商店街や協力店に親しむきっかけづくりを行い，世代間を越えた地域交流と連携の機運を高める活性化イベントを行いました。

それから，テーマ２つ目の個店研修事業でございますけれども，これは各お店がお客様をお迎えする上でのおもてなし術であるとか，お店づくりのための魅力アップセミナーと称しまして，売り場の改善研修やＰＯＰづくりを含めた数々の勉強会や講習会を重ねているところでございます。

そして，テーマ３つ目の商店街創業促進事業でございますが，これは昨年，一昨年とＮＰＯ法人府中ノアンテナさんと協力をいたしまして，商店街内にあります公園で「みんピク」というマルシェイベントを開催いたしました。月１回の開催で，地域の方や若い世代の方々の来場者に楽しんでいただくというのがまず一つの目的でございますが，その一方でこのマルシェに出店くださる方々に会場に対するニーズ調査を行いまして，前向きに考えてくださっている方には開業に向けての方策をともに考え，また可能性を提供することによって２年間で小さいお店ながらも５件の開業に至りました。

そして，昨年より「府中まちなか繁盛大作戦」と銘を打ちまして商業活性化策の中でも難易度の高いとされる，この一店逸品運動という活性化イベントに取り組んでおります。この一店逸品運動と申しますのは，異業種の商店が集いましてそこへ研究会を立ち上げます。その中で自店のこだわりの商品や独自の技術を時間をかけて皆さんの意見交換の中で磨き上げていき，完成したその逸品を地域の方，あるいはいろんな方々にアピールしていくもので，１年目となります今年市内より 15 の事業所がこの研究会に参画し，それぞれの逸品を完成させて１冊の小冊子にまとめ上げました。この紹介ブック，皆さんも目を通していただいた方もいらっしゃるかと思いますが，今年の２月より府中市役所や府中商工会議所，また，市内こいこい施設参加店等で 6,000 部を配付をさせていただき，大変好評をいただいたところでございます。この活動は広島県では府中市が初めての取組でございまして，府中での逸品中の逸品，磨き上げたものを，先ほど申し上げました 10 月 23 日東京で開催されました第４回全国逸品セレクションに広島県を代表して初エントリーいたしました。全国各地 29 の団体の中から先ほど申しましたフード部門，それからノンフード部門の両部門でそれぞれ府中の逸品がグランプリを獲得し，初参加，初エントリー，しかも２部門で独占ダブル受賞に輝いたのは全国でも府中だけという大変異例の大快挙でございまして，広島県府中市を大いにＰＲして，全国制覇をして帰ってまいりました。東京で，府中市から来ましたっていうと，皆さん東京の府中と思われて，東京近郊の方ですと，「じゃあ今度お店へ買いに行きますね。」とか言ってくださって，「新幹線で来てくださるんですか？」とか言うんですけど，非常にそうした，なかなか広島県の府中というのはご存じの方が少ないというふうに思いましたので，今回これをきっかけに広島県府中市を大いにＰＲをさせていただいたところでございます。

それではここで，そのグランプリに輝きました日本一に輝きました両店をご紹介をさせていただきます。

まず，全国フード部門グランプリ，パティスリーパンセの稗田さんと，全国ノンフード部門グランプリのマルミクリーニングの重森さんです。それでは少しずつ喜びの声を皆さんにお届けしたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

（拍手）

○事例発表者（稗田）

皆さん，こんにちは。（「こんにちは。」の声あり）洋菓子店パティスリーパンセの店長，稗田由子です。よろしくお願いします。今回たくさんの方に応援していただき，このような名誉ある賞を受賞いたしましたことをスタッフ一同大変喜んでおります。今回全国逸品セレクションでグランプリを受賞したのがこちらのクッキーシューパックなんですが，今日は皆さんを代表して湯﨑知事にパティシエ気分を味わっていただこうとお持ちしましたので，召し上がってください。

●知　事

出来立て，詰めたて，おいしいです。思わず食べ続けてしまいます。

○事例発表者（稗田）

食べ続けてください。どうぞ。

（拍手）

○事例発表者（重森）

こんにちは。続きまして，旧町名でいいますと西町にありますマルミクリーニングの重森と申します。私どものお店は約 80 年ほど前，祖父が京染とか洗い張りということで商売を始めまして，長らく和服の手入れを営んでいたんですが，その後和服文化が去って，洋服のクリーニングということで商いをしておりましたが，また最近，こうやって和服の技術を皆さんに知っていただければということで，勉強を始めてこういった結果をいただいて非常に光栄に思います。東京では，これ，もう古着屋さんでシミがついているからいらないよっていただいた着物ですね。こういったワインのついたシミなんかを抜いたり，あとこれに，30 年以上前についたシミを現地で機械，薬品を持っていってシミ抜きをしました。それを見ていただいて評価をいただいたという格好になります。確かにこの辺にあったんですが，その時に全部抜いてしまいましたので今はないんですけれどもね。

（笑い）

こういった仕事をしとります。本当にありがとうございました。

それと，全国セレクションに行って思ったんですが，いろんな業種，いろんな商品，いろんな方と出会いまして，いろんな逸品があるんですけれども，一番はそこの経営者，それからアピールされる方，発表される方，この方々は逸品だと思います。私どもも府中の逸品であったり業界の逸品であり続けたいというふうに思います。今日はありがとうございました。

（拍手）

○事例発表者（高橋）

府中では，これより来年１月後半に第２弾のこの府中まちなか逸品ブックを発行いたします。今回はさらにバージョンアップいたしまして，もう，日本全国どころか，世界にも通用するような逸品をつくりたいと，この１年半をかけて協議・検討してまいりました。そして，１月後半に市民の方々を対象した逸品お店めぐりツアーでありますとか，また，２月１日より各店舗におきまして逸品フェアというところも開催させていただきます。も

し，目に触れる機会がございましたら，どうぞ府中のすばらしい逸品に目を通していただき，そして体感をしていただけたらというふうに思っておりますので，よろしくお願いいたします。また来年も 10 月に東京で開催されます全国逸品セレクションに府中としては必ず出場して，連続日本一を目指しておりますので，どうぞ地元の皆様初め，多くの方々にご支援・ご協力いただければというふうに思いますので，応援のほどよろしくお願いをいたします。

最後になりますが，依然として地方の商業をとりまく環境は厳しいものがございますが，個店のよさ，また，魅力を発信し続けていくためにも地域に根差した個店づくり，また，人づくりにさらに磨きをかけていきたいというふうに考えておるところでございます。そして，繁盛隊のメンバーも 20 代 30 代の２世３世さんが多いわけですから，その方たちが次の代にもつなげていけるような活動を今，展開しておかなければというふうに思っておるのが現状でございます。

それでは，以上をもちまして府中まちなか繁盛隊の事例発表とさせていただきます。ご清聴まことにありがとうございました。

（拍手）

●知　事

高橋さん，重森さん，稗田さん，どうもありがとうございました。

（いただいたクッキーシューパックは，）完食をいたしました。どうもありがとうございました。シミを抜いてもらうものはちょっとなかったです。

日本一というのは本当にすごいです。サンフレッチェも日本一，サンフレッチェと同じです。

本当に何でも日本一とか世界一になるというのは大変なことだと思います。サンフレッチェと違って，と思われるかもしれませんが，実際に集まってらっしゃるのは個店のプロの皆さんです。それぞれ自慢の逸品を持っていらっしゃる方々が全国で集まって，食べ物でもプロの人たちの集まりです。その中で一番というのは，僕は本当にすごいことだと思います。

このまちなか繁盛隊は平成 22 年からですが，逸品ブックもできて皆さん，ご存じでした？持ってるよとか，見たことあるよという方はおられますか。

（会場を見て）結構多いですね。

○事例発表者（高橋）

ありがとうございます。

●知　事

こういう活動を始められて，実際に手ごたえはいかがですか。

○事例発表者（高橋）

最初はね，いろいろ模索しながら何をどこから手をつけたらいいんだろうっていうこともあったんですけど，メンバーとともに話をしていくうちに，できることからできる時にやっていこうということで，いろんな取組を始めさせていただきましたところ，市民の方初め多くの方に参加していただいて，目の前で喜んでくださる笑顔，また，今度も来るねっていう投げかけていただけるお声をお店の方々が聞くと，非常に勇気100倍もらえるんです。だからこうした活動を通して各お店の方たちがイキイキとできるような形をつくりたいというのがまず一つの目的でございましたので，少しずつではありますが，形ができつつあるのかなというふうな感触でございます。

●知　事

にぎわいをつくっていくとか，お店ですからお客さんに来てほしいというのもあると思いますが，それ以前にお店の皆さん自身が元気になっていくことにつながっていると思います。それがついには日本一になるということです。始めて５年で日本一までとって，すごいとこにつながっていったと思うのですが，本当に商店街が衰退しているところがたくさんあります。府中も必ずしも昔のにぎわいというほどではないのかもしれませんが，それも人口が減っている部分もあって仕方がないところがあります。それを放っておけば，行政が何とかしてくれるとか，行政のせいにするというのも一つの手なのですが，こうやってご自身たちで取り組まれて，そして自分たちがやる気が出てくるというとこにつながって，日本一にもつながっていくということです。本当にすばらしいと思うのですが，来年に向けて皆さん新しいことでも考えられるのですか。

○事例発表者（高橋）

両名から，意気込みをちょっと。

●知　事

はい。

○事例発表者（重森）

来年度は，マジンガードＺ加工というのをやってみようかなと思っています。

●知　事

今日は名前の発表だけです。それだけでもかなりインパクトありました。

〇事例発表者（重森）

逸品ブックを，見ていただければ，わかると思います。

●知　事

わかりました。楽しみですね。府中の人は１年後にはマジンガードＺサービスがきっと受けられるに違いないと思います。

〇事例発表者（稗田）

次は郷土愛にあふれた府中愛の府中みそと，広島愛のレモンを使ったミソドレモンっていうのを発売します。

●知　事

新しいお菓子ですね。

〇事例発表者（稗田）

はい。おみやげということで。

●知　事

ぜひ，また来年も日本一を目指していただきたいと思いますが，いつかは日本一から世界一を目指してほしいと思います。これからもよろしくお願いをします。

〇事例発表者（高橋）

引き続いて私たちの取組というのはもう，エンドレスなんですね。いつで終わりってことはないんで，次の時代へまたつないでいきながらやっていく活動でございますので，その時々を一生懸命頑張っていきたいと思います。ですから地元の皆様方にもどうぞ応援をしていただいて，何とか時代を越えていけるようにしていきたいというふうに思っておりますので,どうぞよろしくお願いを申し上げます。本日はどうもありがとうございました。

（拍手）

●知　事

ありがとうございました。重森さんがさっきおっしゃっていましたけれど，こういう経営者の皆さんが本当に逸品ですね。

今日発表をいただきました３人の皆様方に，もう一度大きな拍手をお願いします。ありがとうございました。

（拍手）

事例発表③

●知　事

ありがとうございます。

それでは続きまして，次の発表は高校生になります。県立府中東高校インテリア科３年生の新岡春南さん，中島雅貴君にお願いをします。

お二人が通っておられる府中東高校インテリア科は，広島の森づくり事業の一環で市内の保育園や幼稚園，小中学校からの要望を受けて県産ヒノキの間伐材を使った遊具，あるいは家具を製作して贈呈をされています。またデザインを学ぶ全国の高校生が感性と想像力を競う毎日・ＤＡＳ高校生デザイン賞では，現在 10 年連続で入賞中ということで，日本一の受賞回数を継続されているそうです。

今日の発表のテーマは，「府中市とともに」です。

それではよろしくお願いします。

（拍手）

○事例発表者（中島）

気をつけ。礼。（拍手）

これから,広島県立府中東高等学校が取り組んでいる地域貢献事業について説明します。インテリア科３年，新岡と中島です。どうぞよろしくお願いします。（拍手）

府中東高校は，県の唯一の普通科と工業科の併設校です。工業科にはインテリア科と都市システム科があります。インテリア科の実習という授業では，木材加工，デザイン，陶芸，コンピューターグラフィック，製図などの内容で行われています。１年生と２年生の間は木材の特徴や機械の使い方など基本的なことを学びます。３年生では課題研究としてグループに分かれ，各グループで家具や遊具，おもちゃなどを製作します。今では全国レベルのコンテストに私たちの作品を出展してきました。その１つが毎日・ＤＡＳ高校生デザイン賞です。現在 10 年連続入賞中で，これは日本一の受賞回数を継続しています。今年度は６作品を応募しました。先日発表があり，結果は４作品が入賞を決定しました。その一例がこの，ＧＯ・５・五輪ジャーという作品です。この作品はグランプリである銀の卵賞を受賞しました。一輪車は１人で乗って遊びますが，その一輪車を５つつなげて５人で一緒に遊ぶようにしました。通常の一輪車に比べ簡単に乗ることができ，連帯感の生まれる遊具になりました。

○事例発表者（新岡）

それでは，地域貢献事業について説明します。府中市内の児童施設の備品や遊具を，インテリア科の生徒たちがデザイン・製作したものを贈呈し，高校生が地域に貢献することを目的にしています。事業全体の流れについて，まず，府中市内の保育園などの児童施設や,小中学校からの備品や遊具などの要望作品が府中市役所女性こども課へ提出されます。そして，取りまとめた一覧表が本校に届きます。原材料費，広島県産ヒノキ板は府中市森づくり事業から支給されます。そして，実習や課題研究の授業で，各要望作品を製作し，完成した作品を各施設に贈呈するという流れです。

作品づくりの工程について説明します。お互いの意見交換をしながら使う側に喜んでもらえる製品を考えます。大きさ，形，使い勝手を検討しながらラフスケッチを行い，細部のパーツや構造，寸法を明確にするため図面化します。次に機械加工や手加工により材料を寸法どおりに加工して組み立てていきます。組み立てて形になった作品をサンドペーパーで研磨します。きれいに仕上がった作品に塗装して完成となります。

贈呈した作品の一例を紹介します。児童が座っておしゃべりするコミュニケーションベンチ・テーブルと，くぐって遊ぶトンネルといわれる児童向け遊具は地域貢献事業の作品の一例です。贈呈作品は私たちより小さな子が使うので，通常の使用で想定されるより，細かなところへの配慮が必要となります。研磨作業の時，各角を丸くし，触ったりぶつかったときけがのないようにします。

これはままごとセット，靴箱，運動会で使用する入退場門です。

これは児童用の椅子です。これらの作品はけがをしないようにきれいに研磨し，塗装をします。

これは平成 26 年 2 月 26 日に行われた贈呈式の様子です。参加した園児からは,「大切に使います。ありがとうございます。」というお礼がありました。

平成 26 年度に市役所のほうからこのような感謝の気持ちの詰まった冊子をいただきました。地域貢献事業は私たちにとって多くのメリットがありました。使ってもらって喜んでもらえたことでますますやる気になったこと。ものづくりの技を身につけることができたこと。私たちが考えたことが製品になったこと。材料の提供してもらったことで，実習費の軽減につながったことがあります。

最後に贈呈式の新聞掲載記事です。小さな子供がベンチで楽しそうにしています。

これで実践報告を終わります。ありがとうございました。

（拍手）

●知　事

新岡さん，中島君，どうもありがとうございました。

さすが家具の町というか，府中市らしい取組だと思ったのですが，学生の皆さんはインテリア科ですので家具関係のお仕事の家とかも多かったりするのですか。あるいは家具にかかわりたいという方も多いのですか？

○事例発表者（中島）

はい。そういう人もいるのですが，ぼくもそういう家具製造のほうに就職するのですが，人によってはデザインを学びたいという人もいたりして，専門学校に行ったりする人もいます。

●知　事

なるほど。デザインとか家具とかですね。地元の幼稚園とか小学校の要望に応えて，そして府中の伝統の技術を使って実際に作品をつくり，デザインも五輪ジャーなど，楽しいですね。

○事例発表者（中島）

はい。

●知　事

作品をつくって，そして子供たちに喜ばれるという，すごく地域密着で，いいなという感じがします。そういうことはやっぱり実感しますか。

○事例発表者（中島）

はい，そうですね。本当に喜んでもらえたらうれしいです。

●知　事

なるほど。僕は自分が高校生ぐらいの時に，「社会に喜んでもらえたらうれしいな。」ということを考えたこともなかったと思います。本当にすばらしい取組で，社会に役立つということを実感してもらっているのではないかと思いますが，お二人はこれからの進路というか，今後はどういうふうに考えていらっしゃるのですか。家具製造会社のほうに就職を考えておられて，もう決まったのですか。

○事例発表者（中島）

はい。もう決まりました。

●知　事

もう決まったのですね。新岡さんはどうですか。

○事例発表者（新岡）

私は，木工関係ではないのですが，ファッションのデザインを勉強しに大阪へ行こうと思っているのですが，人のために物をつくって喜んでもらえるということは，この事業で学ばせてもらったことなので,大阪で勉強してまた地元に戻ってきて自分が役立てること，地域に貢献できることをしたいと思っています。

●知　事

府中や新市の辺りはファッションの中心でもありますからね。広島県アパレル協会というのは新市にあります。この地域は本当にそういう意味でもデザイン，ファッションの中心地でもあります。地元に帰ってこられたいということですが,帰ってきてもいいですし，あるいは世界へ羽ばたいてもいいですし，ぜひ府中の名前をとどろかせるように頑張ってほしいと思います。本当に将来が楽しみな新岡さん，そして中島君に今日発表をしていただきました。もう一度大きな拍手をお願いします。

（拍手）

●知　事

どうもありがとうございました。

そういえば，グランプリというのも日本一ということですか。

○事例発表者（新岡）

はい。そうです。

●知　事

おお，日本一。

（拍手）

すごいですね。府中は日本一続出です。ありがとうございました。

事例発表④

●知　事

それでは，続いて最後の発表になります。市立上下中学校３年生の谷山莉香子さん，横山愛美さん。そして，上下南小学校６年の新納叶望さん，上下北小学校６年の橋本桜果さん。この４名にお願いをします。

府中市ではご承知のとおり市内全小中学校で小中一貫教育を実施されているわけですが，上下地域の小中学校では小学校区にとらわれない地域全体のふるさと学習を行って，上下のよさを発見することで郷土愛を育てておられます。また上下のよさを町外に発信するために生徒によるガイドツアーや市外イベントでのパンフレット配布などを実施をして地域の活性化にも貢献されています。

今日の発表のテーマは「みんな大好き我が郷土上下」です

それではよろしくお願いします。

（合唱の歌声）

〇事例発表者（４人で）

こんにちは。

私たちは上下町から来ました，谷山莉香子です。

横山愛美です。

新納叶望です。

橋本桜果です。

〇事例発表者（谷山）

今，お聞きいただいたのは小中合同で練習を重ね，心を１つに歌った「コスモス」という歌です。

〇事例発表者（橋本）

先輩！先輩！実は，初めて練習した時，私達小学生は先輩たちの歌声があまりにも凄すぎて，緊張して声が出なかったんです。

〇事例発表者（横山）

え，あんなにいっぱい活動を一緒にしているのに？

〇事例発表者（谷山）

そうそう。体育祭でしょう。部活動体験でしょう。合同清掃でしょう。府中学びフェスタでしょう。

〇事例発表者（新納）

でも，先輩たち，なんか超格好いいし～！！だから緊張しました～！

〇事例発表者（小学生）

ね～。

〇事例発表者（横山）

そうそう，そういえばこの前ＲＣＣにでとったじゃろう。あれどしたん！

〇事例発表者（橋本）

あ，これですか。

（映像）

歴史的な町並みが残る府中市の上下町。そこで暮らす子供たちが町のガイドをかって出ました。今日は小学生が案内する上下満喫バスツアーにフォーカス。

「おはようございます。」

「おはようございます。」

府中市上下町の温泉に集まったのは，地元の上下北小学校の子供たち。14 人の６年生が自分たちのまちをガイドすることになったのです。

〇事例発表者（横山）

いっぱい放送してもらっとったね～。よかったね～。

〇事例発表者（新納）

はい。私たち小学６年生は上下のよさをたくさんに人に知ってもらうために，「上下満喫バスツアー」を計画したんです。

〇事例発表者（橋本）

プルルル♪あ，もしもし上下北小学校の橋本桜果ですが，ＲＣＣ様に取材をしていただきたくて電話をしました。というふうに，取材をお願いしてきていただいたんです。

〇事例発表者（中学生）

よかったね～。（やったね～。）

〇事例発表者（新納）

私たちは４月から，「みんな大好きわが郷土上下」を合言葉に，上下をアピールする活動をしてきました。

〇事例発表者（橋本）

バスツアーを計画し，そのチラシを尾道や福山などいろいろなところに置いていただいたり，新聞に載せていただいたりなどして，参加者を募ったんです。

〇事例発表者（横山）

えらいことしたね～。よしよし。

〇事例発表者（新納）

でも，中学生はもっとすごいって聞きました。

〇事例発表者（谷山）

中学生はね～。57 名が 15 のグループに分かれて上下の活性化案を考えたんよ。

〇事例発表者（横山）

活性化案てわかる？上下を元気にしようという考えのことね。

〇事例発表者（小学生）

ステキ～！

〇事例発表者（谷山）

でも，自分たちの考えでいいか教えていただくために，福山大学の小林准教授に教えてもらったんよ。

〇事例発表者（小学生）

かっこいい～！

〇事例発表者（橋本）

ところで15のグループでどんなことを考えたんですか。

〇事例発表者（谷山）

例えばね～上下町のいいところがいっぱいあるでしょう。それをアニメにして紹介するという考えとかね。

〇事例発表者（新納）

わ，楽しそう！

〇事例発表者（谷山）

上下町に道の駅を作ろうという考えをだしてその建物の外観デザインを考えたり。

〇事例発表者（小学生）

お～！

〇事例発表者（谷山）

他にも，上下のシンボルをふんだんにあしらったデザインシューズを株式会社ニチマンさんに制作の提案をしたり。

〇事例発表者（横山）

上下町の新しいキャラクター「のこドル」を考えたり～。花乱舞とか，ほとぎで盛り上げようとかとか～。

〇事例発表者（谷山）

ジャ～ン！これ見て！！

〇事例発表者（横山）

ポケットティッシュのデザインをしたんよ～！

〇事例発表者（谷山）

会場の皆さ～ん，お持ちですか～？

〇事例発表者（横山）

中身を全部使っても，このチラシは大事にとっておいてくださいね～。きっといいことがありますよ。

〇事例発表者（橋本）

やっぱり先輩たちすごいですね～！

〇事例発表者（横山）

小中合同で活動したこともあります。

〇事例発表者（谷山）

まずは，５月には来場者数 80 万人を超えるばら祭りで，上下をアピールするチラシを配ったことです。

〇事例発表者（橋本）

次に８月には小中合同で鞆の浦に行ったよね～。

〇事例発表者（新納）

私たち小学生は観光ガイドの方からガイド方法を学んだんです。

〇事例発表者（谷山）

例えば？

〇事例発表者（橋本）

全部を説明しないで，「この続きは，次の場所で」といって，期待させる方法はすごかったです。

〇事例発表者（横山）

中学生は，元気な町から，町を元気にするヒントを学びました。

〇事例発表者（谷山）

それから，広島テレビの夕方の番組「テレビ派宣言」で，「まちかど脳トレ・まちかど伝言板」のコーナーにも出たよね。

（映像）

「まちかど中継です。松本さん，お願いします。」

「はい，まちかど伝言板。二組のお知らせがあります。さっき脳トレクイズで見事正解しました，上下のみんなです。早速じゃあね，伝言板もお願いします。」

「今日は，私たちのまち，上下町の宣伝に来ました。まずは，10 月４日日曜日に上下町を巡るバスツアーを行います。」

〇事例発表者（４人で）

「みんな大好きわが郷土上下」

〇事例発表者（新納）

私たちの活動はすべてが順調だったわけではありません。

〇事例発表者（橋本）

失敗することやうまくいかないことのほうがたくさんありました。

〇事例発表者（谷山）

でも，友だちと協力して上下町のために頑張ってきたことは誇りです。

○事例発表者（横山）

私たちはこれからもふるさとを思い，自信と誇りをもって立派な大人になります。

○事例発表者（４人で）

ありがとうございました。

（拍手）

●知　事

谷山さん，横山さん，新納さん，橋本さん，どうもありがとうございました。

特に新納さんと橋本さん，小学校６年生ですがこのチャレンジ・トーク史上始まって以来，初の小学校発表者でございます。

（拍手）

緊張したかな。

○事例発表者（橋本）

はい，緊張しました。

●知　事

とてもそういうふうには見えなかったですね。

またこの寸劇風の発表も初めてでした。発表は劇が入ってすごくよかったと思いますが，ＲＣＣには本当に電話したのですか。

○事例発表者（橋本）

はい，電話しました。

●知　事

誰が電話したの。同級生？

○事例発表者（橋本）

はい。

●知　事

同級生が電話したのですね。上下南小学校かな，北小学校かな。

○事例発表者（橋本）

北です。

●知　事

「北小学校の何とかですけど，ＲＣＣさん」と，電話したのですか。

○事例発表者（橋本）

はい。

●知　事

それだけですごい勇気だと思います。うまくいってよかったね。

○事例発表者（橋本）

ありがとうございます。

●知　事

鞆の浦でもいっぱい勉強して,あそこも観光地ですからね。期待を持たせるやり方とか,ちょっと引き延ばすとか，あまり変な技を覚えないほうがいいかもしれないけれど，観光ガイドには本当に必要なことかもしれないですね。中学生どうですか。

鞆の浦の活動はよかったですか。勉強になりましたか。

○事例発表者（横山）

はい。よかったです。

●知　事

鞆の浦で，地元のガイドさんはどんな方々だったのですか。

おじいちゃん，おばあちゃん？

○事例発表者（橋本）

はい。

●知　事

小学生ガイドとおじいちゃんおばあちゃんガイドで随分違うと思うのですが。

あと，あやめちゃんのデザインを活用していました。今日は実はあやめちゃんのデザインを考えた人もここにいるのですが，ちょっと手を挙げてもらえますか。

以前にチャレンジ・トークで発表もしていただいたんです。連綿とこの伝統が続いているということで，本当にすばらしいと思います。みんなほんわかしてきましたね。みんなにこのほんわか力を伝えてくれて，そして上下の活動がとても活発だというのがよくわかりました。谷山さん，横山さん，新納さん，橋本さんに，もう一度大きな拍手をお願いします。

（拍手）

今日はあと，友達も来てくれています。同級生のみんな，手を振ってください。

女子しかいないけど，男子はちゃんと控えております。男子にも拍手をしてください。

（拍手）

ありがとうございます。

本当にどうもありがとうございました。もう一度大きな拍手をお願いします。

（拍手）

○司　会

ありがとうございました。

以上で，予定の事例発表は終了となります。すばらしい発表を本当にありがとうございました。

閉　　会

○司　会

それでは，ここで，湯﨑知事に本日のまとめをお願いしたいと思います。お願いします。

●知　事

ありがとうございました。本当にすばらしい４組の発表をいただきました。府中市，何かこうやってみると活発に活動されている方がたくさんいらっしゃると同時にさらにそれがすごい高みにまで届いているというケースもあって，改めてすごい地域だなと思います。先ほど発表の中で重森さんもおっしゃっていただいた「経営者が逸品」だというお言葉ですけど，私も本当にそのとおりというか，商店であれば経営者ですが，その他の活動であればそれぞれのやっぱり人ということで，この空き家のことであれば藤原さんとか，それぞれの人がこの地域をやっぱり引っ張っていらっしゃるのだと実感できます。広島県も日本全体も特に何か自然の資源とか天然資源とかあるわけではありませんから，何をやるにしてもこの人というのは全ての力の源泉なわけです。それがただ人も座っているだけだとやはり物事は何も動いていかないわけですが，府中のために，広島県のためにということで，空き家を活性化しようとか地域を活性化しようとか，あるいは商店街を活性化しよう

とか，何かをやってみる。そして小学校中学校の皆さんが言ってくれましたが，必ずしも全てがうまくいくわけではない。失敗もいっぱいありますがその中でうまくいくことも出てくるし，失敗から学ぶこともたくさんある。そしてできることからやろうと商店街の中で始められたということが，日本一につながっていく。私はそういうものではないかと思うのです。本当に自分の身の周りの中で見過ごしていることや，こうしたらいいなと思っているのですが，何も手をつけていないことが，いっぱいあるのではないかと思います。そういうことに失敗してもいいから，あるいは自分ができることでいいから何かを取り組んでみると，また違った明日が生まれてくるのではないかと思います。住民の皆さんの多くがそれに取り組んでいくと，本当に一歩ずつ一歩ずつ，大きな力になっていくと思います。大きな輪になってそれが本当に活性化した府中とか，あるいは広島県を元気にしていくとか，そんなことにつながっていくのではないかなと思います。決して何か大きなことをやれば済むということではない。本当に身近なことから，できることからやることで大きな違いが生まれてくる。そういったことが今日発表から本当によくわかったのではないかと思いました。

改めまして，今日この皆様の経験を共有していただきました発表者の皆様に大きな拍手をお願いをしたいと思います。

（拍手）

どうもありがとうございました。

以上で今日の会は終了なのですが，最後に１つだけ私からお願いがございます。昨年８月，広島市で大きな土砂災害ございました。皆さんご承知のとおりですが，再びこういう災害を発生をさせないというために，県では従来以上に防災に力を入れて取り組んでいます。そしてそれに加えて災害に強い広島県の実現のために，県民の皆さんや自主防災組織，あるいは事業者また当然行政が一体となって取り組む広島県「みんなで減災」県民総ぐるみ運動というのを４月からスタートさせました。お手元に資料も配付をさせていただいております。この運動は５つの行動目標を定めて実施をしていますが，災害はいつ起こるかわからないということが特徴で，災害に備えて身の回りの土砂災害であるとか，あるいは洪水の危険箇所，避難場所や避難経路などをまずは知るということが大変重要であります。災害危険箇所や避難場所につきましては，県民総ぐるみ運動・知る，でインターネットで検索していただけますが，今日はこの会場の後ろにハザードマップという地図を掲載してあります。ぜひお帰りの前にご覧いただいてハザードマップとはこういうものだというのをご確認いただいて，これは市でも配付をしていますので入手もしていただければと思います。そしてまた改めてご家庭や職場，また地域の中で皆さんとご一緒にご確認をしていただければと思いますので，どうぞよろしくお願いします。

それでは以上でございます。

本日はどうもありがとうございました。

（拍手）

○事務局

知事，すみません。ちょっと私たち事務局のほうから会場の皆さんに１つだけお知らせをさせていただいてもよろしいでしょうか。

●知　事

はいはい。

○事務局

私は,県の広報課でフェイスブックとツイッターの担当をしております寺本と申します。

さて，皆さんは，広島県の公式ＳＮＳの存在はご存じでしょうか。

広島県では，フェイスブックやツイッターといったインターネット上のサービス，ＳＮＳを活用して,皆さんの暮らしに役立つ情報を日々発信しています。先日は県内の 23 市町によるリレーＰＲという連載を行って，グルメや観光情報など，各地域ご自慢のネタを掲載しました。今画面に出ているのが９月に掲載した府中市の投稿の写真です。三郎の滝，府中家具，備後府中焼きや上下の古い町並みなど，府中市の魅力がたくさん詰まった投稿でした。このように県の公式ＳＮＳでは，地域に密着をした情報を含め，毎日投稿を行っています。広島県のＳＮＳは知らなかったよという方はぜひ県のページにいいね，またはフォローしていただければと思います。

本日，お配りさせていただいてる封筒の中にもオレンジ色のＳＮＳの紹介チラシを入れております。フェイスブックやツイッターをやってないんだけどなという方はぜひ，本日のこの機会にご登録をいただいて県の投稿を見ていただければと思います。

これからも皆さんの生活のお役に立てる情報を１人でも多くの方にお届けするべく，また本日のチャレンジ･トーク同様に,広島県の元気を発信しどんどん盛り上げていくべく，頑張ってまいりたいと思いますので,ぜひ皆様のお力もお借りできればと思っております。

以上です。お時間いただきありがとうございました。

（拍手）

○司　会

事務局からの時間もいただきまして，ありがとうございました。

以上をもちまして，湯﨑英彦の地域の宝チャレンジ・トーク，閉会とさせていただきます。ありがとうございました。

（拍手）

なお，ご来場の際にお渡ししましたアンケートを回収しておりますので，お帰りの際，

よろしくお願いいたします。

　では，本当に本日はどうもありがとうございました。